

～2022 年医学部入試へ向けて 小論文対策は 4 月から～

第1回 医学部入試『小論文』～今、求められる力～ 一会塾 MEDICAL 小論文講師 原田広幸



医学部・難関大受験予備校『一会塾』『一会塾 MEDICAL』にて「メディカル小論文」を担当。一会塾の「願書作成会」にて医学部入試における志望理由書の作成指導や 2 次試験の面接対策を数多くこなす。志望理由書作成においては、パーソナル・ヒストリーを軸にした志望理由の表現方法を指導しており、医大ごとの特徴を踏まえた大学志望理由の指南には定評がある。医学部入試の実態を熟知しており、講談社 Web「現代ビジネス」をはじめ、一会塾ホームページでも医学部受験および教育情報を発信し続けている。東京外大卒、東工大(院)修了。

さらなる医学部小論文情報を知りたい方はこちら →



■はじめに

多くの医学部の 2 次試験では、面接のほか、小論文が課されています。なぜ、医学部入試では、**学科試験に加えて、小論文試験を実施する**のでしょうか。

まず、小論文試験の入学者選抜における意味は多様ですが、面接試験の目的と重複する点も多くあります。当然ですが、その中には、**タテマエとホンネ**の部分があります。

■伝統的な小論文試験の考え方

タテマエの理屈は、「医学部の小論文試験は、医師としての素養をみることを目的としている」、というものです。これは、面接試験の存在意義を説明する理屈と同じ**タテマエ**論です。では、どうして同じ目的のために、面接と小論文の両方を課す必要があるのか、と思われる方もいるでしょう。そのとおり、これはやはり、あくまで**タテマエ**の話で、実際の小論文試験の出題には、ほかのところに**ホンネの部分**があったのです。

そのホンネの出題意図とは、受験生に、**国語力、とりわけ専門書を読むだけの日本語読解力と、レポートを書くための作文力を試す**ことでした。また、小論文の答案を読めば、ある程度の頭の良さ（**学科試験では必ずしも現れてこない知性や能力**）がわかる、と言う先生もいらっしゃいましたし、実際、そのような面もあると思います。

さて、ご存知のとおり、医学部入試の主要科目は、英語、数学、理科 2 科目です。国公立医学部の受験生は、国語の試験が共通テスト（旧センターテスト）

で課されますが、私立医学部では、一部を除き国語は出題されません。そこで、**最低限の国語力（読解力と作文力）を測る**ために、小論文が課されるようになっていったという経緯があります。

ですから、逆に言えば、もともと、ある程度の国語力・作文力がある学生や、国公立医学部志望者の国語力も高い上位層にとっては、小論文は対策する必要もないものと捉えられてさえました。（実はそれほど甘いものではないのですが）。

このような経緯から、医学部入試の小論文試験は、形式的な面では、面接試験ほど多様ではなく、テーマの面でも、その場で考えれば何とか自分なりの解答が書けるような内容のものが多くなっていった、というのが実情です。

■タテマエ論への回帰と試行錯誤

ところが、近年、出題されるテーマにおいて、非常に大きな幅が見られるようになり、**何を書けばいいのか、大人でも思わず悩んでしまうようなもの**が増えてきています。

形式面から見ると、小論文試験の形式の多くは、あいかわらず、新聞記事や新書・一般書などの抜粋といった「課題文」を読ませることでテーマを把握させ、それについて自分の考えを述べさせるものが大半です。字数は、**600 字～800 字程度**で、これを **1 時間**ほどの試験時間で解くものが多く、ここにも変化は見られません。

しかし、内容面では、**これが医学部の入試か、と思わせるくらい、多様な出題**が増えているのです。たとえば、以下のようなものです。

- ・「東山魁夷の絵画をみて思うことを述べる」
- ・「戦場で兵士が猫に餌をやっている写真を見て自分がこの猫だったらどう思うかを述べる」
- ・「りんごを剥いたことがない子どもに向けてナイフの使用説明書を書く」
- ・「自分の現状や将来の意気込みが伝わるような川柳を読み解説する」
- ・「ジャンルを問わず自分の好きな曲について述べる」
- ・「ある短歌を読み感じたことを書く」
- ・「他人のものを奪って学生の願いを叶えるという方法をとる壺の精に対し、学生はどんな願いを願うか、ストーリーを創作する」
- ・「不幸を表現するイラストの中から最も共感できないものを選び、理由とともにタイトルをつける」
- ・「町の本屋さんをつぶさないためにどうするか」

いずれも、一部の大学の出題傾向ではありますが、心理テストを思わせるものから、大きな社会問題の比喩・象徴を読み解かせるような課題まで、非常にバリエーションが多いことがわかるでしょうか。**高校の先生でも、頭を抱えてしまいそうな、一筋縄ではいかないような問題**であることはわかつて思います。

とくに、**順天堂大学医学部の小論文試験**は、ほかに先駆けて、このような「**変わり種**」の出題が行われてきました。今年（**2021 年入試**）に出題されたのは、『ナショナル・ジオグラフィック』誌（日本語版：日経ナショナル・ジオグラフィック社）「絶対に住めない 世界のゴーストタウン」特集に掲載された、ある写真でした。

[\[https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/product/19/070200023/\]](https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/product/19/070200023/)

それは、**大量に廃棄された錆びついたドラム缶の山と、採掘場跡のような巨大な砂山を背景に、一匹のアザラシが写っている「奇妙な」風景写真**です。

この問題の詳細については、**一会塾ホームページに載せていただきました**ので、そちらを御覧いただきたいのですが、いずれにせよ、写真に込められているさまざまな含意・寓意を読み解き、可能な限り、**自分や社会の問題に引き寄せて解釈**することが求められています。

■ 医学部が求め始めた「勉強では得られない資質」

ここでは、あきらかに、「**医師としての素養をみることを目的とする**」という、本来の小論文入試の目的、タテマエ論への回帰が見られます。

写真をつぶさに見て、詳細に分析し、それを言語化する。さまざまな断片を組み立て、筋の通ったストーリーを考える。ストーリー（仮説）を立てて、前後関係、過去・現在・未来を推測する。仮説を既存の知識に当てはめる。…**これらは、医師の診断と非常に似ています。見る力、分析力、総合力、言語力と、人間という生物の生理と病理を扱う総合科学である「医学」に必要とされる能力**です。

■ 「対策は効かない」？

こんな問題に、まともに取り組もうとすると、もはや何をやっても付け焼刃にしかならないと考える人も多いと思います。一切の対策を拒んでいるかのようにすら思える人もいることでしょう。

このポイント、つまり「**対策をさせない**」というところにも、こういった課題を出してくる大学の**出題意図**の一つがあるのです。

従来は、そして現在も半数以上の大学は、医療を中心とした社会問題や、中長期的な我が国の課題、個人的な体験や身近な倫理的な問題について、課題文を読ませたうえで意見を述べさせるような出題がほとんどでした。

こういった典型的な小論文の課題設定では、練習や日ごろの準備が論文の出来を左右することになるため、十分に対策可能であり、勉強する科目としてとらえることができていました。

しかし、近年の「**対策を拒否**」しているような**出題傾向が意味している**のは、「ただの受験勉強」だけでは得られない資質を、医学部は求め始めているということを意味します。

もちろん、日本語の読解能力や叙述能力はあったほうがいいし、その力を小論文試験で測るという目的がすべてなくなったということでは決してありません。しかし、いままでの**対策が可能**な小論文試験では、**受験生の差がつかなくな**ってきているのが現状なのです。それから、学科試験で合格水準の点数を取りさえすれば、ある程度の国語力があると想定できるし、そうでなくても、大学時代で伸びることが期待できます。

医学部入試における面接試験も小論文試験も、どうやら対策を拒む方向へ、つまり、学科試験との違いを明確化し、インテlectualな（知性的）能力ではなく、**エモーショナルな（情動的・感情的）能力を試す方向**へと向かっているように見えます。なお、これは、医学部以外の一般の大学入試においても同様の傾向が見られます。

■では、対策はどうするのか

「**対策を拒否**」するものでも、**対策は可能**というのが、**受験のプロである私たちの結論**です。というのも、試験で測られるのは、能力のほんの一部であり、大半が、試験時間も1時間ほどと短い試験です。試験問題を多様化するにも限界があり、制度設計の仕方は、必ずパターン化されます。

まずやらなければならないのは、従来型の小論文の伝統的なスタイルの勉強です。段落の作り方や、ど

のような内容をどういった順番で、どのように書くのかといった書き方のメソッドをまず習得し、それと並行して、医療倫理を中心とした良質な課題をたくさん解いていくことが重要です。

そして、それに加えて、これからの小論文対策に必要なのは、「**ビジュアル課題（絵や写真）**」「**グラフ・統計の問題**」「**状況設定型の問題解決**」「**感情や情動を理解し説明する**」などの、近年の課題のパターンごとの演習です。

これらの問題を解くには、独学は難しいでしょう。しかし、良い教材・良い教師は、必ず近くにある・いるはずですよ。

たとえば、絵や写真の分析についての比較的読みやすい書籍では、秋田麻早子『絵を見る技術 名画の構造を読み解く』（朝日出版社）、エイミー・E・ハーマン『観察力を磨く：名画読解』（早川書房）などがあります。

価値観や感情・情動をめぐる議論を行なう技術については、伊勢田哲治『哲学思考トレーニング』（ちくま新書）などがあります。

他にもいろいろな良書があり、これらを、小論文の先生、理科の先生、英語の先生などなどと一緒に読みすすめるのはどうでしょうか。こういったものを教科書として読んで、実践し、先生に質問するのです。そして、一緒に考えて見るのです。こういった作業に付き合ってくれる先生は、知的好奇心・向上心が強い先生です。探せば、皆さんの学校にもいるはずですよ。

私たちは、しばらくは、こういった試行錯誤は続けざるを得ないと思います。しかし、これは、出題する大学側も同じで、皆さんのポテンシャルを見ようと、試行錯誤を続けています。「どうしてそんなに付き合わないといけないの？」とふてくされずに、「**楽しい!**」「**面白い!**」と考えられたなら、**あなたは医師に向いている**ということなのかもしれません。